

1. 子安神社遺跡発掘調査報告書

(表 紙)

愛知県大府市

子 安 神 社 遺 跡

大府市教育委員会

序

近代社会の急速な発展の中において、我々は先人の残した貴重な文化遺産を存続していくかなければなりません。

近年、本市の発展とともにさう地域の変貌は目をみはるものがあります。その中で失われていく文化財の保護を積極的に推進する必要があることを痛感しています。

このたび、大府市教育委員会が昭和57年と58年の兩年度にわたり子安神社遺跡を発掘調査しました。この結果、弥生土器や土師器の高環・壺・かめなどの遺物を採集し、市誌編集の資料としても多大の成果を収めました。

本書はその調査報告でもあり、市民各位のご活用をお願いいたします。

なお、調査ならびに執筆していただいたかたがた、並びにご協力をいただいた皆様に対して深く感謝の意を表します。

昭和59年3月

大府市教育委員会

教育長 清水勝

例 言

1. 本書は、大府市教育委員会が市誌編さんとの資料収集のために実施した第1次・第2次の調査報告である。
2. 本道路の調査は、下記の構成によって実施した。

調査主体 大府市教育委員会

調査担当者 加藤 岩 藏（日本考古学協会会員）

福岡 猛志（日本福祉大学教授）

立松 宏（日本考古学協会会員）

調査員 近藤 英正 美船 俊介 浅野 純子

伊藤 好子 高橋 久美子 松浦 佳香

事務局 社会教育課長・久野 源之

市歴史民俗資料館員・伊藤 邦英 阿知波 修

協力者 市文化財保護委員・中井 俊道

子安神社氏子総代・山口 久信

3. 本書の執筆は加藤岩藏、福岡猛志が分担したが、「地形・地質」については柳原博市誌自然編集委員（知多郡美浜町立河和小学校教諭）に依頼した。
4. 写真は阿知波修が担当した。
5. 出土遺物は大府市歴史民俗資料館において保管している。

目 次

第 1 章 遺跡の位置
第 2 章 遺跡付近の地形・地質
1. 地 形
2. 地 質
第 3 章 発見の動機と調査の経過
1. 発見の動機
2. 調査の経過
第 4 章 遺 構
第 5 章 遺 物
第 6 章 後 論

挿図目次

第1図 子安神社道路の位置及び周辺道路分布図.....
 第2図 子安神社周辺地形図.....
 第3図 子安神社道路付近の地質図.....
 第4図 S₁区造構図
 第5図 A・E・H・I区発掘断面図
 第6図 B区造構図.....
 第7図 C区造構図.....
 第8図 D区東壁断面図.....
 第9図 S区出土の遺物(1).....
 第10図 S区出土の遺物(2).....
 第11図 S区出土の遺物(3).....
 第12図 S区出土の遺物(4).....
 第13図 S区出土の遺物(5).....
 第14図 S区出土の遺物(6).....
 第15図 S区出土の遺物(7).....
 第16図 B区・D区・C区・II区出土の遺物 ...

圖 版 目 次

図版 1 (1)子安神社遺跡の遠望
 (2)子安神社遺跡の調査状況

図版 2 (1)S 区の溝状造構
 (2)B 区の遺構

図版 3 (1)～(3)高坏

図版 4 (1)～(3)高坏

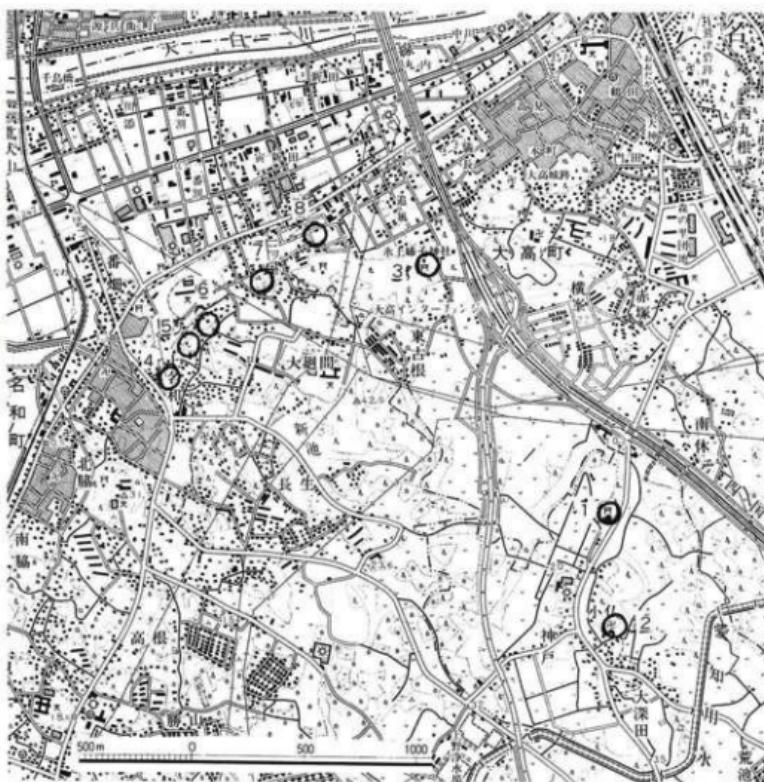
図版 5 (1)～(3)鉢形土器

図版 6 (1)～(3)壺形土器
 (4)甌形土器

図版 7 (1)小形土器類
 (2)甌形土器片
 (3)S 字口縁付直腹の口縁部

第1章 遺跡の位置

愛知県には知多・渥美の二つの半島があり、太平洋に向かってカニの手状に延びている。大府市は知多半島の基部に位置し、中央部を南北に断層線が走り、市域の丘陵部を東西



第1図 子安神社遺跡の位置及び周辺遺跡分布図

- | | | | |
|----------|--------|----------|----------|
| 1.子安神社遺跡 | 2.円通寺 | 3.水上紳子神社 | 4.トドメキ遺跡 |
| 5.カブト山遺跡 | 6.兜山古墳 | 7.三ッ屋古墳群 | 8.菩薩遺跡 |

に二分している。断層低地には鞍流瀬川と平行してJR東海道本線が敷設され、市内に大府駅と共和駅がある。

共和駅の西北方、約2km一帯は大府市共和町の西北端にあたり、通称「木ノ山」と呼んでいる。この木ノ山に鎮座する神社が「子安神社」である。神社の北方約500m付近を名四国道(国道23号線)が東西に走っている。西方には知多半島道路が南北に開け、これを挟んで日本武尊伝説と関係の深い水上姫神社と向かい合っている。そして知多半島道路が名四国道に接する大高インターチェンジに近い。

子安神社遺跡は子安神社境内(大府市共和町子安90番地)および周辺の地に広がっている。遺跡は標高26mの島状丘陵に立地している。とくに東側は雑木が茂っている急な斜面で、その裾にはかつて伊勢湾が入り込んでいた沖積低地が広がっている。この低地の中央部を「木ノ山川」が北流して天白川と合流し、伊勢湾に注いでいる。

子安神社遺跡と現在の伊勢湾岸とは、直線的に測って西方2.5kmの距離がある。また、その直線上2kmの地点には、子安神社遺跡とほぼ同時期の集落跡であるカブト山遺跡が存在する。このカブト山遺跡の西には4世紀後葉に比定される兜山古墳がかつて存在した。

(加藤岩蔵)

第2章 遺跡付近の地形・地質

1. 地形(第2図)

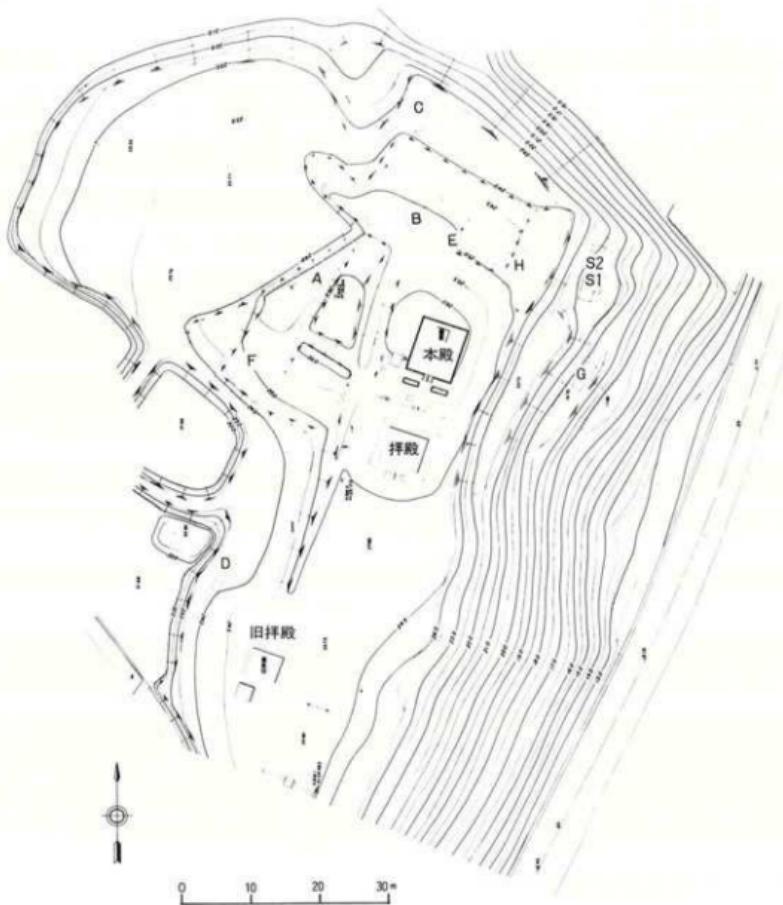
市域が位置する半島北部は、濃尾平野東側に南北に連なる尾張丘陵南部と知多半島の背骨を形成して南北に連続する丘陵地北端部とから成る。

丘陵は、市内中央部を南北に通る東海道本線に沿った石ヶ瀬川・鞍流瀬川の谷により、東西に二分される。東部の丘陵は高さ40~50mでやや急な斜面をもつ。それに比べて、西部の丘陵は高さ70mを超える山頂もあるが、およそ40m程度でゆるやかな斜面のものが多い。これら丘陵の樹枝状の谷間に平地と沖積地が広がっている。

本遺跡が発見された市域の北西部は、南北に連続する旧海食崖の丘陵突端部及びそれにつながる島状地形が発達している。本地点は、神社本殿がある高さ26mの島状地形の東緩斜面および周辺の畠に存在する。

2. 地質(第3図)

市域でみられる地層は、すべて新生代後期のものである。これらは、今から600万年前の第3紀鮮新世の常滑層群と200万年前から現在にいたる第4紀洪積世の地層と段丘堆積物お



第2図 子安神社周辺地形図

より沖積世の地層に分けられる。

長草町大池地区で試錐された帝国石油ボーリング資料によれば、地上にみられた常滑層群は地下に520mの厚さをもって堆積する。さらにその下層には、知多半島南端の中新世師崎層群の延長が260mの厚さをもって存在し、地下780mで基盤岩に達する。

常滑層群は、岩相から砂礫層・砂層・シルト層に分けられる。砂礫層は、直径2~8mmの細礫と粗砂を主成分とし、3cm以下の礫を含むことが多い。礫の種類は、チャート・シルト・石英斑岩・フォルンフェルスなどである。チャート礫の地層中に占める割合が非常に高い。

砂層やシルト層は、東海道本線の西側に広く分布している。砂層を構成する砂の粒子は、主として石英と長石からなり、少量の雲母がみられる。シルト層は灰白色をしており、水分を含む量によりその色の濃さが変わる。風雨に洗われた層は、非常に白っぽく見える。砂層に伴うシルト層は濃い灰色のものが多く、砂礫層に伴うものは桃色になるものが多い。

常滑市周辺でみられるシルト層は亜炭を挟むことが多いが、市内では比較的少ない。

道路の地層上の位置は、この常滑層群のシルト層の一部に相当し、その厚さは6m位である。上方には60cmの表土が堆積し、その下位に褐色のシルト層2m、灰白色のシルト層4mが堆積する。この地点でのシルト層は、全体として灰白色を呈し、所により砂層を団塊状あるいはレンズ状に挟む。表土と接するシルト層は褐色を呈することが多い。これは、シルトの造岩鉱物の違いや雨水による土中鉄分の沈澱によると考えられる。これらの現象は、大府市域をはじめ半島全域に分布する常滑層群シルト層の一般的特徴と考えてよい。

(柳原 淳)



第3図 子安神社遺跡(○印)付近の地質図

第3章 発見の動機と調査の経過

1. 発見の動機

子安神社は、鎌倉時代から室町時代にかけては「鎌山天神」、江戸時代には「子安大明神」と称され、近郷の人々に農産・安産の神として崇敬されていたと伝えている。しかし、神社境内および周辺の地が弥生時代人の生活址であることは知られていなかった。

遺跡の発見は、東海市在住の池田陸介氏(日本考古学協会会員)が、昭和55年に土取り工事跡で土器を発見したときに始まる。池田氏は採集した土器を大府市文化財保護委員の中井俊道氏に見せた。中井氏より連絡を受けた市教育委員会事務局では、直ちに現地踏査を行った。

現地は雑草が生茂っていたが、これを除去すると高さ約2mの断面に土器包含層が現れた。包含層の範囲は明確でなかったが、土取り工事で残った雑草地および神社境内を「子安神社遺跡」と称して保護することとした。

このころ、大府市では市誌刊行の動きが盛り上がっていた。昭和56年5月、第1回の大府市誌編さん編集委員会が開かれ、発刊方針の説明や編集委員の委嘱が行なわれた。歴史編原始・古代・中世の部(のちに「第二編原始・古代・中世」となる)は加藤、福岡、大塚の3名が担当することに決定した。

以来、3名は資料の収集に努めたが、日時がたつに従って資料の不足が次第に目立ってきた。とくに『万葉集』に「年魚市潟潮干にけらし……」と歌われている伊勢湾側では、子安神社遺跡以外に適當な資料が収集できない状態であった。

そこで市文化財保護委員会と協議し、昭和57年8月3日より子安神社遺跡の発掘調査を実施することとした(第1次調査)。

さらに第1次調査の結果、遺跡の性格、範囲の決定と資料の一層の収集を目標として、昭和58年7月より第2次調査を行った。

2. 調査の経過

第1次調査(S区調査)

昭和57年8月4日(水)

調査開始予定日であった8月3日は、台風11号が通過するため休日とした。台風一過の晴天。9時30分、市教育委員会に調査関係者が集合して現地へ赴く。

10時より発掘の準備をする。まず南北8m、東西2mの(S発掘区)を設定し、中央部に幅1mの壁を作り、S₁・S₂のグリッドに分けた。そして発掘をすすめる。

8月5日(木)

S₁では中央部に溝状の遺構が現れた。溝状の上層は有機砂壤土層が覆い、行基焼、土師器が出土した。この遺構はS₂に向って傾斜をなしていた。

S₂は午後の作業終了近くにいたって、遺物包含層に達したが、この調査は明日に残した。

8月6日(金)

S₁は遺物を発掘するには余りにも狭い。このため東壁を基準にして幅2m、長さ4mほど拡張した(S₁拡張区)。S₁拡張区の表土層からは、遺物が出土しなかった。

午後の調査は、S₁とS₁拡張区を集中的に行う。両区は共通の褐色有機砂壤土層まで達すると、以後は層序の変化に留意しつつ調査した。間もなくして、S₁拡張区は地山に達した。溝状遺構内には、有機土が充满していた。

8月7日(土)

昨日、S₁区は調査が完了した。本日より調査の重点をS₂区に移す。溝状遺構の褐色有機土層を排除すると、遺構内から土器が押しつぶされた状態で出土し始めた。

8月8日(日)

トレーナー設定の時に残した、S₁とS₂の境の壁を取り除く。するとS₁の溝状遺構はS₂の溝状遺構と接続した。そしてS₁よりS₂に及ぶに従って広くなり、次第に深くなっていた。

8月9日(月)

遺跡発見の動機となった断面が崩れないため、発掘調査は崖端より1m手前で中止した。そして発掘区の写真・実側図を作製した。

午後は発掘区の埋め戻しをして、第1次の調査をすべて終了した。

第2次調査(A区～I区調査)

昭和58年7月22日(金)

9時30分、調査関係者は市教育委員会前に集合して現地に赴く。現地で参加者に昨年の発掘調査の結果、今後の調査計画、発掘上の注意事項などを説明する。

まず、拝殿の西側に南北10m、東西1mのトレーナーを設定して調査を開始する(A区)。午後、A区の北方に東西1.5m、南北11mのトレーナーを設定して調査を開始する(B区)。B区の表土を排除すると、赤褐色土層が現れ、山茶碗が出土した。

7月23日(土)

調査開始前から雨が降っていたが、10時ごろに止んだ。

B区は大府市高齢者能力活用協会の人たちの協力をえて調査した。中央部北寄りの所で鬼板(含酸化鉄分石)が大量に出土した。ピットは2か所検出された。その1は弥生土器片、他の1つは拳大の礫が出土した。

A区は地山まで比較的浅く、発掘は午後2時ごろに完了した。遺物は出土しなかった。

7月24日(日)

B区からはピットが数か所検出された。そこで、発掘区を拡張した。B区より崖端に向かって、長さ10m、幅1mのトレンチを設ける(C区)。

C区では幅10cmの溝が崖端に向かって現われ、その中より行基焼が出土した。

7月25日(月)

B区は出土した土器が小破片であるため、時期の判別が困難であった。ピットは7か所検出され、中から土器片や炭化物などが出土した。

C区は行基焼が出土した付近を拡張した。その上層より行基焼が、下層から土師器と弥生土器が伴出した。

D区を鳥居に近い地点に設定した。まず、落葉を排除して上層をはぐと、江戸時代前期の瓦が出土した。

7月26日(火)

東海地方には梅雨明けの宣言があった。C区は実測図を作製。D区は昨日よりの調査を続行。B区は拡張区をさらに拡張して発掘調査をすすめた。

7月27日(水)

A区は埋め戻し作業を行った。B区は、昨日来の調査をすすめ、最後に実測図を作製した。D区は有機土層を排除すると、弥生土器の壺形土器と高环の脚部が出土した。

7月28日(木)

D区は実測図を作製して調査を終了する。

現在、本殿裏に一段低い平地がある。この地はかつて本殿が建っていたが、中世に焼失したという。ここにE・Hの発掘区を設定して調査した。落葉の下に鬼板と地山が現われ、土地が削平された状態であった。焼失の跡はまったく見られず、遺物も出土しなかった。

F区をA区とD区の中間位置に、G区を昨年の調査地の南方1mの地に、それぞれ設定して調査した。

7月29日(金)

EとHの両区は実測図を作製した。

I区をD区の北壁寄りに設定して調査をした。この表土層より行基焼が、有機土層より弥

生土器の脚台が出土した。

7月30日(土)

午前中はG区とI区の調査を行う。

午後は各区の埋め戻しをした。そして4時に第2次調査の日程をすべて終了した。

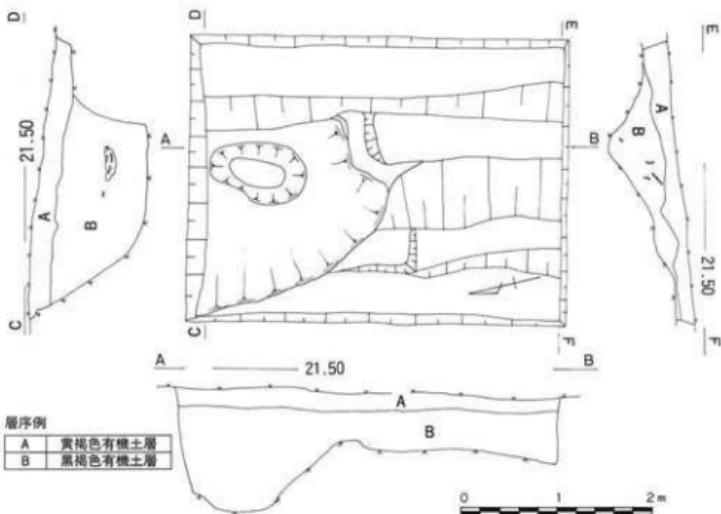
(加藤岩蔵)

第4章 遺構

発掘区は、第2図に記されているように、昭和57年度に発掘されたS区58年度のA~Iの各区に及んでいるが、遺物の発見に伴って行われたS区の他は、いずれも範囲確認のための試掘である。従って以下、それぞれの調査区ごとに所見を述べることにしたい。

1.S区(第4図)

本殿東北の崖面の上部にせまいテラス状の平坦部がある。その北端の、急激に落ち込んでいる斜面(それ自体、大規模な土取り作業によって生じたもので、本来はさらに北にむかって平坦な面が伸びていたものである)から、欠山式土器が出土することにもとづいて、その出土点につらなる地点に、S区を設定した。



第4図 S区遺構図

グリットS₁では、表土の下から溝が検出されたが、有機物をふくむこの溝内の黄褐色土は、外側の土よりもはるかに固いものである。溝内の土に有機物がふくまれていて、部分的に黒色化していることに留意しなければ、周辺の土の方が柔らかいのであるから、逆にそちらの方を掘り進めたくなるほどのものであるが、この有機物混入層は、下部に行くほど漸移的に砂質分が多くなり、また湿りを帯びてくるので、多少とも掘りやすくなる。しかし、この移行は、あくまでも漸移的であって、明確な層序として図示できるものではない。

これが溝をなしていることは、この内部からのみ弥生土器と土師器が発見されること、その両側および下部の地層(粘質土混りの砂質土層)からはそれが一切検出されないとすることによって確かめられる。

溝内の土器は、主として溝の底部付近にかさなりっているものの、浮遊状態のものもまた見うけられるのであって、後には固まってしまうことになるこの土の流入と時期をほぼ同じくしたものと思われる。

S₁の部分では第4図のごとくはっきりと溝を検出できるが、さらに北に延ばしたS₂の部分では、すでに擾乱されており、溝内土と溝外土がブロック状になって入り乱れていた。溝についても、明確に図示できる状態はない。そして、その状態のまま崖の崩壊面にいたるが、遺物そのものはこの擾乱層の中も断続的にふくまれている。

本殿のある部分は、盛り土をしたものではなく、むしろその南側などは削平されたものであるから、この溝は、丘陵の頂上付近をとりかこむように、やや低い地点に掘り込まれたもので、住居はその内部にあったとみることが妥当だろう。とすれば、遺物は上部から溝内に捨てられたか、落ち込んだものであろう。

2.A区(第5図)

東側がやや小高くなつておき、西側には小さな崖がある平坦部である。崖の下は畠地状であるが、かつては鉄骨家屋が建てられていたといふ。

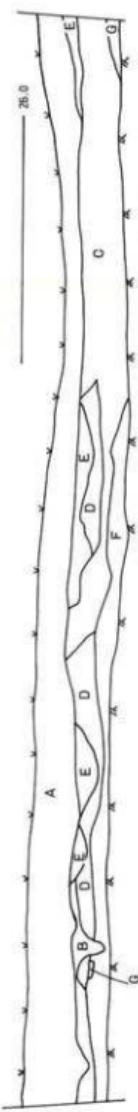
地形的にみて、この崖は畠地(あるいは建物跡をふくむ平坦地)を造成することにさいして形成されたものとみて間違いないので、遺跡・遺構がありうるとすればこの地点であるとしてA区を設定した。

しかし、その内部から、遺構・遺物あるいは有意の地層などは、全く検出されなかつた。

3.B区(第6図)

本殿とその西側の小高い部分(A区の東側の部分)との間は、かつては道として利用され

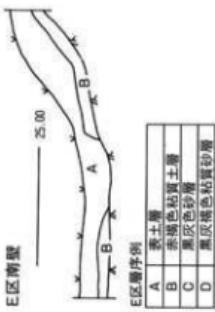
A区南壁



A区剖面图

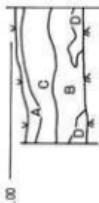
A	表土层
B	有根植物混生黑褐色粘质土层
C	自生植被DFD黑褐色粘质沙土层
D	赤褐色粘质砂土层
E	赤褐色粘质砂土层
F	黄灰带黑色粘质砂土层
G	白色砂质层

E区南壁



A	表土层
B	赤褐色粘质土层
C	黑灰色砂质土层
D	黑灰褐色粘质砂土层

E区北壁



I区南壁



A	表土层
B	黄褐色砂质砂层
C	深灰色粘质土层
D	棕色粘质土层

I区南壁



H区西壁

A	表土层
B	黄褐色粘质砂层
C	黄灰色粘质土层
D	浅板层

H区西壁



A区东壁

ていた谷状の細長い窪地である。本殿の前面から背面にぬけるために、本殿から西方につらなる低いマウンドを掘削のようにきりひらいたものであろう。

そのマウンドがおわるあたりから北側にむけて、平坦に近いゆるやかな傾斜がある。この地点で、表採により弥生式と思われる土器片が見出されたので、B区を設定したところ、表土の下の赤褐色粘質土層の中に、ピット状に表土とは異なる有機物混土層を見出し、その底部(地山に接する)で弥生土器の小片が検出されたので(第6図G-HラインのH点に近い部分)、このトレンチを南および西に拡張した。

この赤褐色粘質土層の下部には、灰白色の粘質土を混えた黄褐色砂質土層の中に有機物の混入するピット状のものが認められ、その中には弥生土器の小片と思われるものがわずかながらふくまれているのだが、それは基底部(地山)にまで達していない。後述する地山に掘り込まれたピットとの関係を考えれば、これらは他所から移動してきた混入塊とみるべきであろう。

なお、この赤褐色粘質土層の中からは、中世陶器(行基焼の山茶碗)の小片が見出された。

B区の南側部分では、地山に掘り込まれた、その上層の赤褐色粘質土層には全く及んでいないピットがいくつか認められる。そのうちいくつかは、浅い窪み程度のものであるが、あきらかに掘り込まれたものもいくつかある。第6図のP₂には、土器の極小片が認められるが、これはピットというよりは、凹んだ部分にそれが集まっている程度のものである。P₁—P₆はそれよりもずっと深いもので、ピット内部の埋土は、地山上面の赤褐色ではなく、地山の土と同質のものにわずかに有機物を混じえたものである。

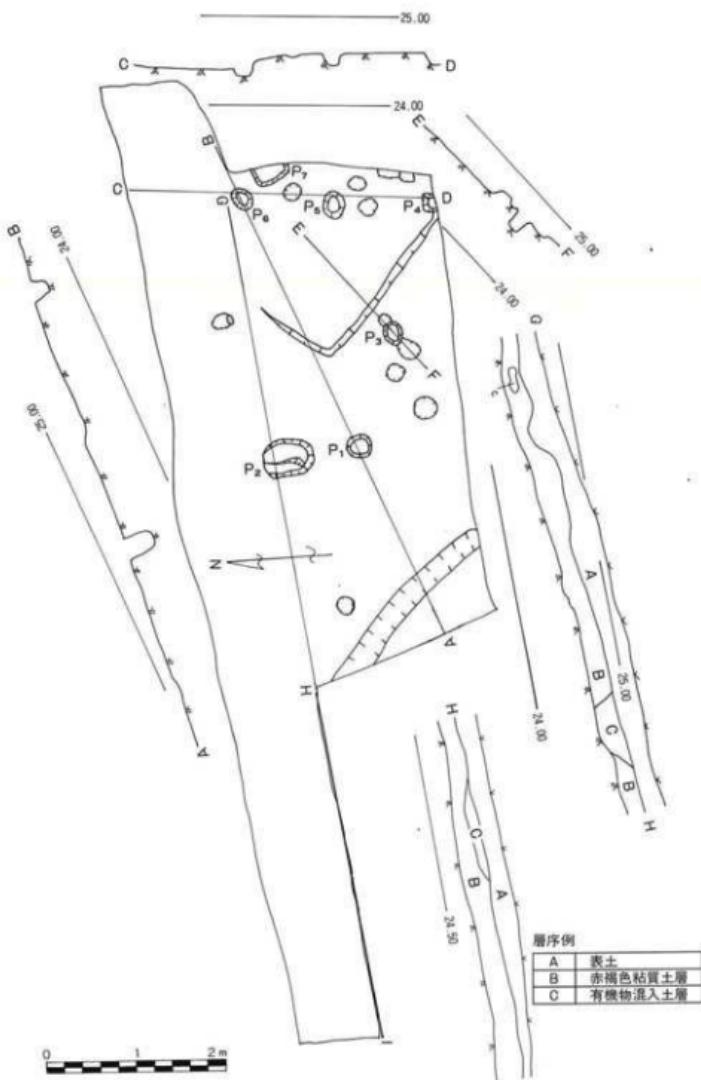
P₂とP₃は、単なる有機物ではなく、明確な炭化物を含んでいる。

また、この発掘区の西端部に、ごく浅い溝状の窪みがある。また東側部分は、直角に近い形に浅く掘り下げられたところがある。第6図にみるごく自然的な傾斜とみるにはやや不自然なところがあるし、ピットとのかかわりもあるから、人為的なものとみなすことも出来よう。

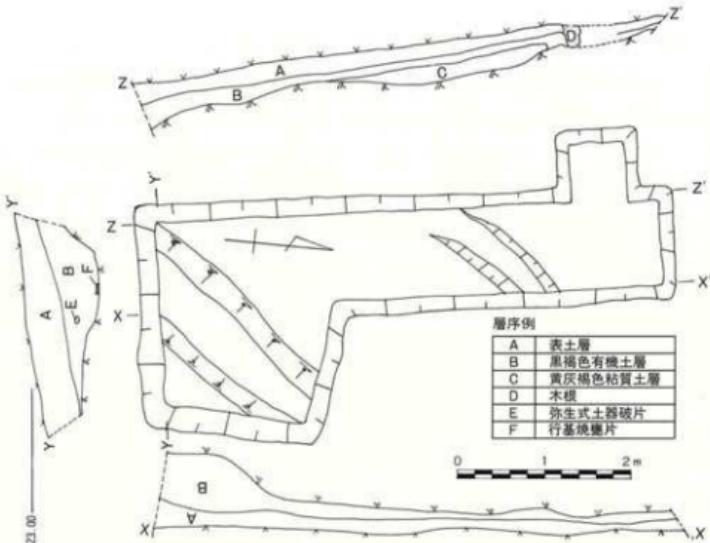
ただし、直接これにかかわって遺物を見出すことが出来ないし、ピットの大きさなどについてもなお検討を要する点もあるから、これだけの発掘結果でその意味について論及することはさけておきたい。

4.C区(第7図)

B区から北にむかってゆるやかに傾斜が続いているが、10メートルほどの距離のところに小さな崖がある。その下は、またゆるやかな傾斜面である。その北側は、急激に落ち



第6図 B区遺構図



第7図 C区遺構図

込んでいるが、それは大規模な土とりの結果であるから、その下方には遺構は全く存在しない。

B区より下位のゆるやかな斜面に、C区を設定した。B区とこの部分の地形とのかかわりを勘案してのことである。なお、表探によって、中世陶器(行基焼第二型式の甕の口縁部)が得られている。

C区では、東側にごく浅い溝、西側でやや深い溝が検出された。いずれも、自然的なものか人為的なものかを確定するだけの条件をもたないが、西端の溝を埋めていた黒褐色有機土層中より、弥生土器および土師器の小片が見出された。ただし、その最下部の地山直上で、型式等は不明ながら行基焼の甕の底部破片が見つかっているから、この有機土層が溝内に流れ込んだ時代は、早くとも中世以降ということになろう。地山の土質はB区と同じである。

5.D区(第8図)

拝殿にむかって左側、旧拝殿の北西の一帯にも、ゆるやかな傾斜をもった地帯があり、表探によって、行基焼とともに瓷器の小片と思われるものが得られているので、その地点にD区を設定した。

D区からは、欠山式および寄道式と考えられる弥生土器が出土している。しかしながら、土層はやや複雑に入り乱れていて層位的確認が出来ない。寄道式と判断される壺の口縁部も、欠山式土器の出土層の下部からではなく、混在する形で出土している。

また、このトレンチの北側の部分では、レンズ状をなす黒灰褐色砂層(第8図)から、欠山式の小形土器が出土しているが、同じ層内には多量の棧瓦が混在している。この棧瓦はD区の東南にある「鍬山」堂のそれと同窓である。したがって、この層は近世以降の混



第8図 D区東壁断面図

入層であり、それ以降黒灰色砂層が堆積したものと考えねばならない。その上層に落葉などが積もりそれが入り混って有機化が進んだのが、黒色砂層をなす表土である。この表土と同じ土層がより下層から見出されるのは、擾乱の結果であろう。

なお、このトレンチの南端近くで、地山にまで掘りこまれた溝が検出された。この溝は人工的なものだが、比較的新しい時代に造成されたものと考えざるをえない。なぜならば、第8図において明らかなように、上記黒灰色砂層(B層)が棧瓦をふくむD層を直接覆っているが、B層はまたC層および地山をも直接に覆っており、その間に別の層をはさんでいないからである。もし、溝がD層の形式以前から存在していたとすれば、その底部になんらかの堆積がみられるべきであろうが、そのような痕跡はいっさい認められない。

それ以外には、地山にもその上面を覆う各地層中にも、造構に類するものはいっさい検出されていない。後述するII区でも、わずかながら弥生土器片が認められるから、おそらくこの東方部分に遺跡があって、それが拝殿前広場の造成に際しての削平によって破壊され、遺物をふくんだ土砂が西側におし出されたとすべきであろう。

6.E区とH区(第5図)

B区の東方、本殿の裏側にあるのがこのE区およびH区である。このあたりは、全体としてゆるやかな傾斜をもっているが、地形図(第2図)にみられるように、この地点は四角くえぐられたようになっている。それが、何らかの意味をもつのか否かを検討することおよび、B区のピット群の延長上に、なんらかの造構が続いているかということを確か

めるために設定した調査区が、EとHである。

ともに有意の所見を得ることが出来なかった。なお、H区においては、地山の直上に、酸化鉄を大量にふくむ層(鬼板)がひろがっている。

7.F区

A区に、造物、造構などの痕跡がいっさい認められなかつたことをうけて、それに隣接する地点に確認のため設定した調査区がF区であるが、A区と同様、造物等は全く検出されなかつた。

8.G区

S区とのかかわりで、その南方にある小テラス状の部分に造構がありはしないかという想定のもとにトレンチGを設定した。

当初は、この地点は前年発掘のS区とほぼ同じ標高にあるものとして試掘したのであるが、測量の結果、S区よりも約2メートル下位にあることが判明した。

このトレンチでは、20~30センチメートルの厚さの表土の下に、きわめて固い有機層があつて、その層より欠山式の弥生土器が検出された。

この固い有機層は、S区とはほぼ同一のものである。ただし、有機物の含有度はこちらの方が高く、木根などがからみあっていて、発掘区を拡張してみたものの、面の抜がり方も層の重なり方も、明確に把握することが出来ず、図面の作成も覚束ない状態なので、それ以上の作業は中止した。

S区とは、2メートルの高低差があるにもかかわらず、同一の地層が認められることがらすれば、S区よりG区にかけて下って行く形で溝が続いている可能性もあるが、東側の斜面から崩れ落ちた土がここに堆積して固化したこととも考えられよう。いずれにせよ、この造物含有の黄褐色を帯びた有機層は、きわめて固いのが特徴である。

9.I区(第5図)

D区とのかかわりで、それよりやや高い西側の地点にI区を設定した。地山はD区と共に通する粘質土であるが、その上部にブロック状をなして堆積する褐色粘質土層から欠山式の弥生土器が数点検出された。ただし、いずれもこの層の中に浮いた状態で含まれていたものであり、造構に類するものも全く見出されないので、これまたD区と同様に、他所から混入したものと推察される。

10.造構に関する小結

本殿付近は、拝殿よりも一段高くなつておらず、元來の地形が生きている可能性もあるが、拝殿からその前面(南方)にかけては、程度は不明ながら明らかに削平されている。

このあたりに、かつては弥生時代の住居地が存在していた可能性もある。西側は、その土を押し出したらしく、地層はすでに擾乱をうけている。地山までを全面的に発掘すれば、新たな所見が得られる可能性もあるが、これまでのところでは、この一帯が弥生時代の遺跡範囲にふくまれるとする証拠は見出されない。

本殿北側については、B区の状況をふまえれば、住居地が遺存している可能性が強いものの、現段階ではこれも確実視するわけにはいかないだろう。

これに対して、本殿の東から東北にかけては、少なくとも、この部分に溝があったことは確実である。ただ問題なのは、溝が部分的なものなのかあるいは全体的に周間にめぐらされていたものかということと、現時点ではその点は不明としか言いようがないのだが、周濠だった可能性は大きいであろう。この溝は、弥生時代の生活址と密接に結びついたものとみておきたい。

また、西方に拓がる畠の縁辺では、中世の行基焼や古代の瓷器の破片が表採される。子安神社のあるこの丘陵が、弥生時代の遺跡となっていることは確実であるが、古代から中世にかけての累代にわたる生活地あるいは祭祀の場所であったとみることも許されよう。

(福岡 猛志)

第5章 遺 物

第1次調査出土遺物

S区 出土した遺物はすべて土器で、弥生土器と土師器に分けられる。

1. 弥生土器

土器の形態は高環形、壺形、壺形、鉢形、蓋形の5種類に分けられる。

高環形土器(第9図1~5・10~13、第10図、第11図1・3・7)

第1類(第9図1~5) 壕部は外反りの口辺部が棱を作りて下底に接続した盤状を呈している。口辺部は無文のもの(1)と柳描きの波文を施したもの(2)、内面に2条の横線をめぐらしたもの(3)がある。すべて内面は鏡磨きがみられる。脚部は丈が高く、上部が柱状で下方に向って内湾気味に開いている。柱状部には柳描きの横線を数条めぐらしているもの(5)があり、下方に円孔を数個あけている。

第2類(第9図10~13、第10図、第11図1・3・7) この類の壺部は口径が22~23cm、深さが9

cm内外で、大きくて深い。環部の口縁部は斜め上方に向って内湾気味に開き、腰部には棱を作っている。口唇部の内面は斜めに面取りをしている。脚部は裾に向って内湾気味に開き、その上半部には櫛描きの横線を数条めぐらし、円孔を四方からあけている。そして窓で環部の外面および脚部の外面を研磨している。

この類の製作技法は、第9図の11・12などによると、まず環部と脚部とを別個に製作する。環部の底面には、脚部の頸と同じ大きさの孔あるいは凹部を作り、これに脚部を差込んで整形仕上げをしている。なかにはただ差込むのではなく、環部の凹部と脚部の頸をマッチ棒状の木製品で接続しているものもある。

第3類（第11図1・3・7）出土例は少数であるが、環部は腰部で稜を作らずに、外面とも丸味をおびているものである。脚部は円孔を作りて下方に向って八の字状に開くのが通例である。中には3のように、口縁部の内側を肥厚して数本の沈線をめぐらしているものもある。この類は第2類の欠山式土器と古墳時代の土師器との中間型式ともいべきものである。

彫形土器（第12図1～8・10、第15図1・2）

第1類（第12図1・3～8）短かい口頸部が「く」の字状に外反する。口端部には笠状用具による刺突文をめぐらしているもの（5）がある。胸部には刷毛目を有するものがある。

第2類（第12図2、第15図5）球形の胴部に、外に向って張り出した後、直立する口縁部が付く。口縁部には笠状用具による刺突文がめぐらされているものがある。この類の底部には脚台が付くのが通例である。

第3類（第15図1・2）球形の胴部に内湾気味の口頸部が付く。器面には櫛状用具による横線と縦線がみられる。この類の底部には脚台が付く。

第4類（第12図10）口縁部が一旦外に向ったのち再度立ち上がって「S」字状に外反し、胴部は無花果形に仕上げ、底部に脚台をつける。いわゆるS字状口縁台付彫である。この彫は器壁が3mm程度できわめて薄く、器面に櫛状具によるかき目痕がみられ、肩部に数本の平行線文が施されている。そして口縁部の立ち上りの部分に櫛状具による刺突文が施されているのが特徴的である。

壺形土器（第13図）

第1類（第13図1～3・13）口縁端のやや肥厚した口頸部が外方に向って開く壺形土器である。口唇には櫛描きの横線をめぐらし、口縁の内面には櫛状用具を押捺した斜線列をほどこしたもの（1）、櫛状用具で羽状文をほどこしたもの（13）などがある。

第2類（第13図5～8）ほぼ球状に等しい器体に、内曲しながら長く伸びた口頸部がつい

た壺である。器面は研磨されている。底部は上げ底のもの(5・6)と平底のもの(7)がある。

第3類(第13図9~12、第14図12・14) 器高が10cm未満の小形の壺である。完形の9は球形の器体に外反する短かい口頸部がつく。底部は平底である。第13図11の底部には脚台がついている。器面は研磨したものと櫛状用具で整形したものとある。

鉢形土器(第14図1~3)

形態によって2種類に分けられる。

第1類(第14図1・2) 偏球形の胴部で、口縁部がわずかに外反している。底部には透かし孔を有する脚台が付いている。器面はともに平滑に仕上げている。

第2類(第14図3) 半球状の胴部に「く」の字形に外反した短い口頸部をつけている。底部は平底である。

蓋形土器(第14図5・6)

2個体出土している。ともに縁辺部は欠損しているが、器形は笠形で頂部に環状の鉢を付けている。表面は刷毛目が見られる。

2. 土師器

土師器の形態は高环、甕、壺の3種類に分けられる。

高环(第9図6~9、第11図2・4・5・6・8)

第1類(第9図6~9、第11図2・4・6・8) 环部は深く口辺部がやや内湾して幅広く開く。下底部に棱をつくっているものとつくっていないものがある。环の底部は比較的小さい。脚は3~4個の円い透し孔を有し、裾が大きく開いている。第11図6は同類の他の高环形土器より新しい形態である。

第2類(第11図5) 环部は比較的浅く、下底部に棱をつくっている。脚は円い透し孔を有した裾が大きく開いている。第1類よりも新しい形態といえる。

甕(第12図9・10・11、第15図3・4・5・6)

第1類(第12図9、第15図3・4) 口頸部は「く」の字状に外反し、頸部はやや肥厚して口端に向って薄くなる。器面は荒い条痕もあるが、刷毛目がほどこされているのが通例である。底部には脚台が付く。

第2類(第15図5・6) 弥生土器の甕形土器第4類のS字状口縁台付甕の系統に属するが、口縁の櫛状具による刺突文および肩部の平行線文がなくなるのが特徴である。

壺(第14図7~10)

口頸部が「八」の字形に開くが、短頸と長頸の二形態がある。なかには口縁内部に4本の

沈線をめぐらしているものもある。

鉢(第14図11・13・15)

器高が10cm以下の小形である。「く」の字形に開く短頸を付けたものと無頸のものと2種類ある。15は古式土師器に属する製塙土器の脚であろう。

第2次調査出土遺物

発掘した調査区はA区～I区であるが、A・E・F・H区から遺物は検出されなかった。

B区(第17図1・2)

1. 弥生土器(第16図1)

口縁端をやや肥厚した口頸部が外方に向って開く壺である。

2. 土師器(第16図2)

口頸部が「八」の字形に開く壺形土器である。

3. 中世陶器

山茶碗の小破片で、底部にはもみ痕のある断面三角形の高台が付いている。

C区

1. 中世陶器

山茶碗と小皿の小破片である。山茶碗の高台にはもみ痕が付いている。

D区(第16図3～13)

1. 弥生土器

壺形土器(第16図3～5・8)

3は口縁端をやや肥厚して口端に2個1組の円板状浮文をつけている広口壺である。4は4本歯の櫛状用具で2段の横線と波文を配した広口壺である。5は頸部の付け根に角ばった段を作り出し、この上下に竹管による小円列を配し、肩部に櫛目斜線をほどこしている壺である。3は4あるいは5の口辺部であるかもしれない。8は壺の底部である。寄道式。

高环形土器(第16図6・7)

6、7とも高环形土器の脚部であるが、7は寄道式の伝統形態を遺存した欠山式である。

鉢形土器(第16図9)

いずれも小形である。口辺部がわずかに外反している。

器台形土器(第16図13)

上下両端が欠損しているが、鼓形である。

2. 土師器(第16図10～12)

いずれも小形の鉢である。

3. 灰釉陶器

碗の破片で、器体はゆるやかに内湾して立ち上がり、口端はわずかに外反する。

4. 中世陶器

山茶碗と小皿の破片である。

5. 近世瓦

軒丸瓦で、子安神社境内にある銀山堂の瓦と同范である。

G区

1. 弥生土器

高环形土器(第16図17・18)

17は環部上半と脚部下半を欠損しているが、環部は浅く内側に屈曲して立ち上り、円形の透し孔を有する脚部はゆるやかに外反する。あるいは器台形土器かも知れない。18は環部が碗形をなし、脚部は外反する。

壺形土器(第16図14～16)

14は口縁端を肥厚した口頭部が外方に向って開く。前型式の手法を継承している。16は口頭部が欠失しているが、短頸が外に向って開く小形の壺で、器面に刷毛目がある。

2. 土師器(第16図15)

口頭部がわずかに内湾している壺。

I区

1. 弥生土器(第16図19・20)

19・20とも台付變形土器の脚台である。19は小形である。

2. 中世陶器

山茶碗の破片で、型式の判別は困難である。

遺物に関する小結

出土した遺物は土・陶器のみで、その大多数が弥生土器である。

もっとも年代の古い土器は、S区出土の高环形土器第1類(第9図1～5)およびD区出土の弥生土器(第16図3～5)で、弥生文化後期中葉に比定されている寄道式(注1)あるいは山中式(注2)と称されている時期のものである。ただし、D区出土の土器は次の弥生文化後期後葉の欠山式土器への移行期ともみられる文様配置の省略があり、S区出土の寄道式土器よりも新しい時期のものとも考えたい。

これら寄道式新期土器以外の弥生土器は欠山式の時期に属するものである(注3)。しかし、中にはS区出土の高环形土器第3類のように、型式的に古墳時代の土師器への傾斜が

みられるものもある。ところで、近い年代は豊橋市波ノ上遺跡第1号堅穴で熱残留磁気方位測定が行われ、4世紀初頭に相当する測定値がえられている(注4)。その堅穴の土器は、現段階では欠山式の直後の型式とされている(注5)。東三河と子安神社とは距離的には相当離れているが、欠山期の年代はほぼ同じである。

次に4世紀初頭は尾張・三河地方では古墳時代初期にあたり、古式土師器が出現する時期でもある。子安神社遺跡出土の土師器にも、この時期の型式のものがある。王江式(注6)、元屋敷式(注7)と称されている土器がそれである。

灰釉陶器は平安期瓷器の第2型式後半(10世紀後半)に属するもので、野々宮古窯(注8)の製品に似ている。

注 1. 豊橋市教育委員会『瓜郷』 昭和38年

2. 大參義一「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集』1968

3. 久永春男・芳賀賀陽『欠山遺跡』『瓜郷』豊橋市教育委員会 昭和38年

4. 渡辺直経『波ノ上堅穴住居の地磁気年代学的考察』前記『瓜郷』所収

5. 久永春男氏の御教示によると、「波ノ上遺跡の土器は現段階では土師器の初頭におかれるべきものであることが明確になった。」とのことである。また、久永氏は蒲郡市門前遺跡発掘調査報告書に「欠山式土器の第三期の段階、すなわち欠山式土器に土師器が伴出はじめる時期はむしろこの地方における土師器の初期におくべきであった。」と記している。

6. 斎藤嘉彦「王江式土器について」『於御所遺跡』岡崎市教育委員会 1974

7. 注2と同じ

宮腰健司「尾張における『欠山式土器』とその前後」愛知考古学談話会 1987

加藤安信『中根山遺跡』愛知県幡豆郡吉良町教育委員会 1989

8. 加藤岩蔵『野々宮古窯』大府市教育委員会 昭和50年

(加藤岩蔵)

第6章 後論

知多丘陵上に立地している子安神社遺跡は、天白川に注ぐ大高川の上流に形成された前川谷にのぞんでいる。この遺跡を2次に亘って発掘調査した結果、遺跡の範囲は調査区A-1の間であると推定される。とくにS区、B区からは当時の造構が検出された。

S区で検出された造構は土取りで大部分滅失し範囲は狭少であったが、断面がU字形の溝状をなしていた。そしてS区出土の弥生土器・土師器は、この溝状造構内より出土した。この状態で造構の機能を考えると、寄道式から欠山式にかける時期に開削された濠で、余り年数を経ずして廃止されたと推察される。年代的には3世紀後半から4世紀である。

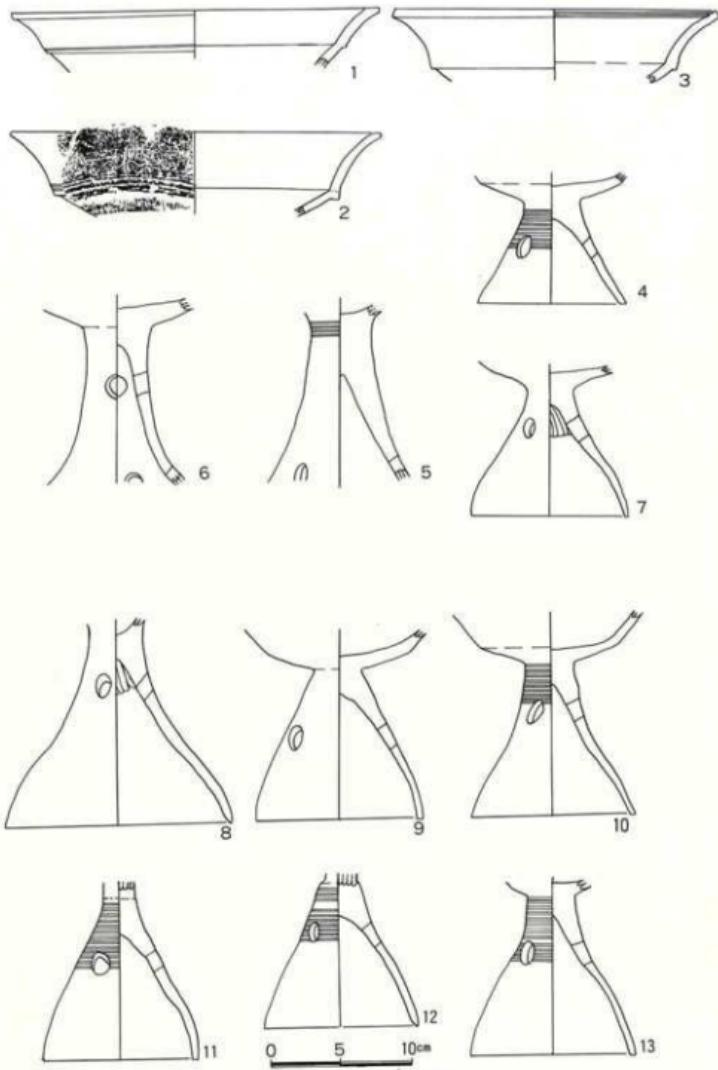
また、B区で検出された造構にピット群がある。だが、付近の樹木の伐採が不可能なため調査区の拡張ができず、ピット群の性格を明確にすることはできなかった。しかし、ピットの中には弥生土器が有機土と詰つており、S区の溝状造構とはほぼ同時期であり、住居址の柱穴の可能性が認められる。

出土した土器で特色のあるものにはS字状口縁台付甕がある。特徴は、口縁をS字状にし、器壁を厚さ約3mmと非常に薄く仕上げ、しかも堅く焼成している。弥生後期後葉の欠山期末に伊勢湾沿岸で出現して急速に東日本に広がり、古墳時代前期に盛行した土器である。これは取りも直さず、伊勢湾に近い子安神社遺跡の成立・発展期と一致し、第12図10が出現時に相当し、第15図6がこれに繼ぐ。またこの時期は大和王権が尾張を拠点として国家統一を進めていた時期でもある。

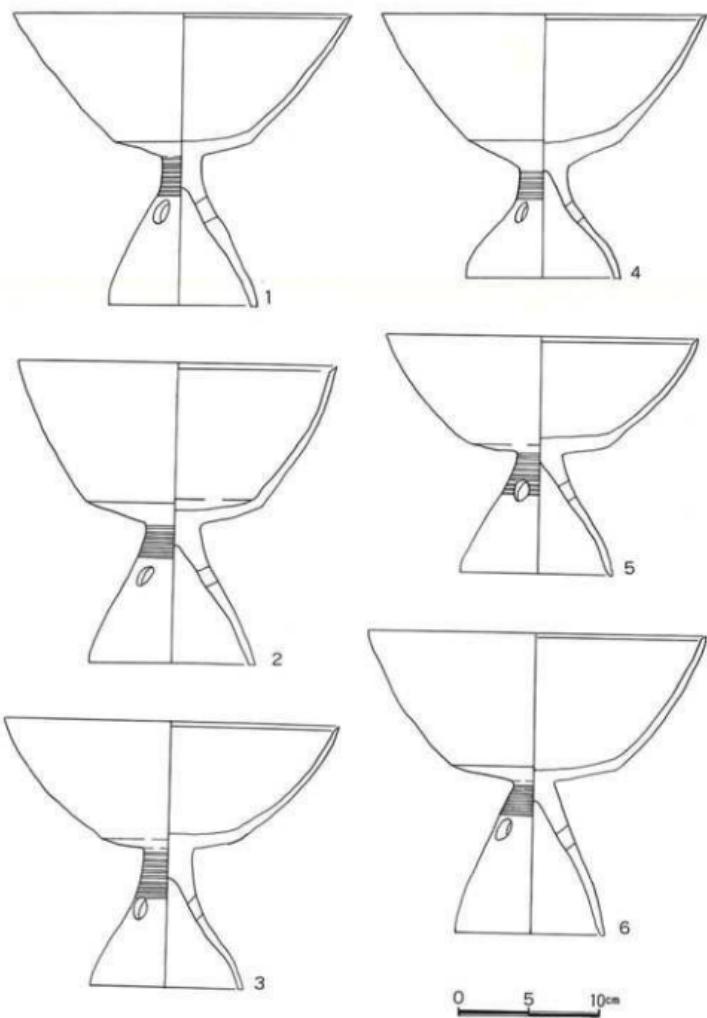
このようなS字状口縁台付甕が出現する以前の尾張地方には、これほど大形で器壁が薄く軽い土器の存在は知られていない。S字状口縁台付甕の出現は新しい土器製作集団の存在を示すものである。本遺跡でこれが出土したことは、この土器製作集団が子安神社遺跡を形成した人々と交易関係を有していたことを物語っている。

遺跡の中心的位置に存在する子安神社の創建年代は明確でない。隣の円通寺の文禄2年の縁起によれば、円通寺の開基は僧行基で、寺の西方坂本に子安大明神を祀る神社が鎮座していたとある。行基開基説の信憑性については確めるすべもないが、円通寺には「馬頭觀世音菩薩」「子安准胝觀世音菩薩」という藤原期の仏像2体があり、寺の存在を暗示している。また神社も存在したであろうが、知多郡式内社には見当らない。だが、平安末期に作成されたという尾張国内神名帳には、「智多郡 従三位鉢山天神」とあり、張州府誌はこれを「木の山村 子安明神祠」と記載しており、現在の子安神社地に中世初頭頃は鉢山天神が祀られていたと推察される。そして、出土した平安朝瓷器や山茶碗などは、これらの神への祭祀用具であった可能性がある。

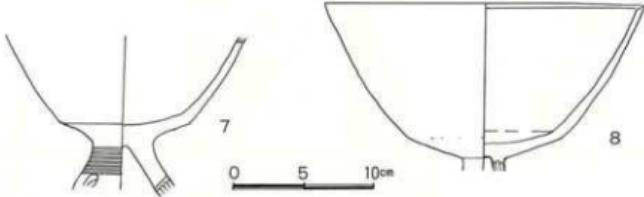
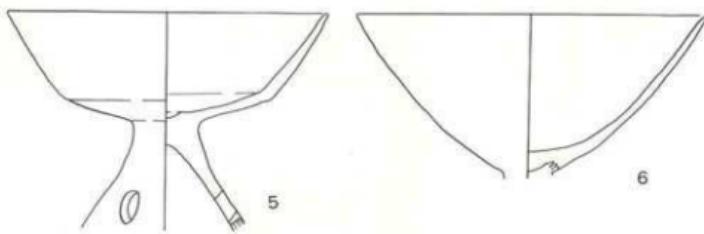
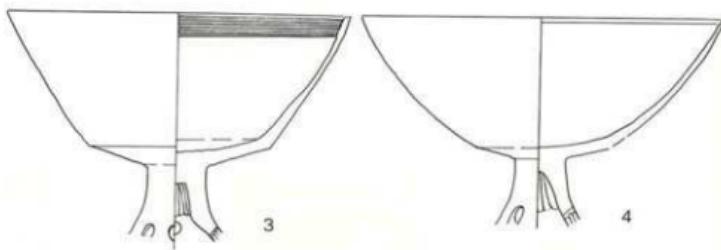
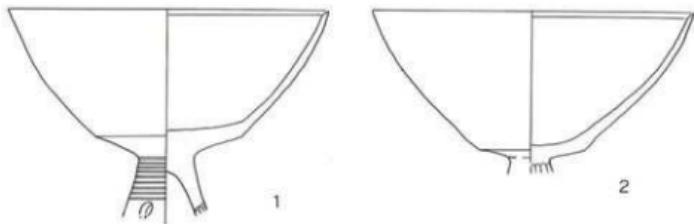
(加藤 岩藏)



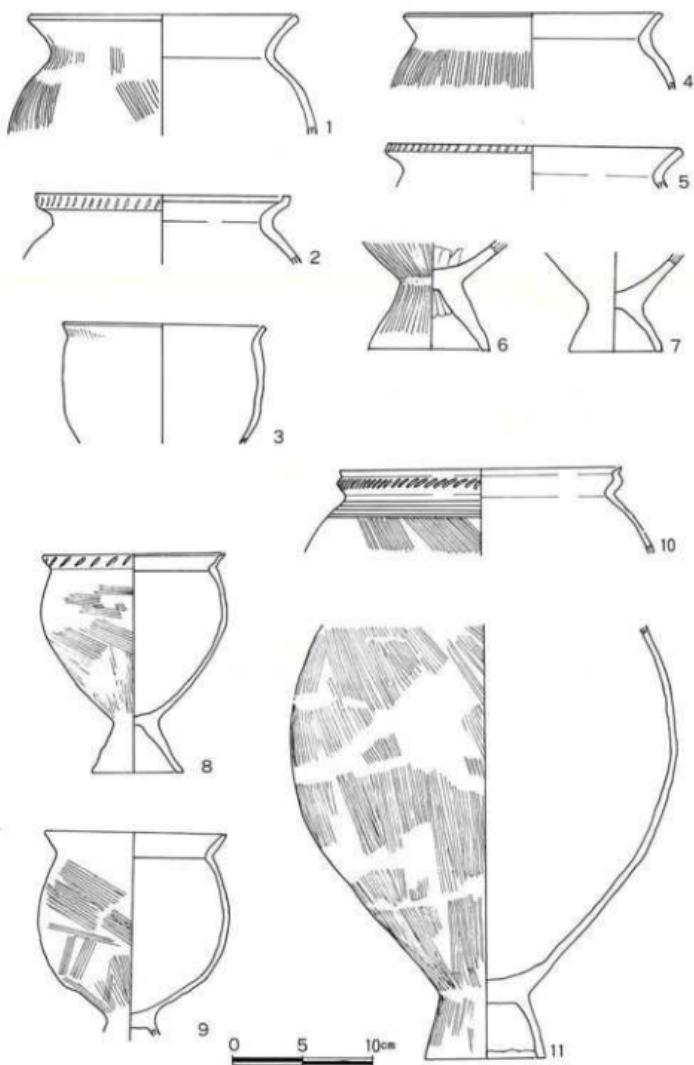
第9図 S区出土の遺物(I)



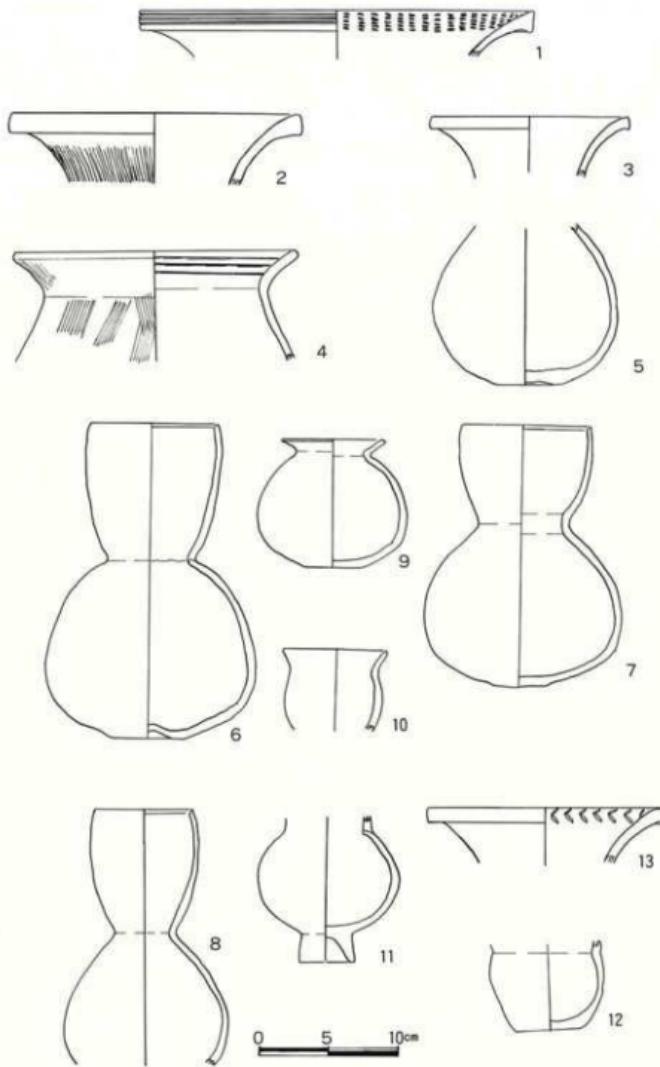
第10図 S区出土の遺物(2)



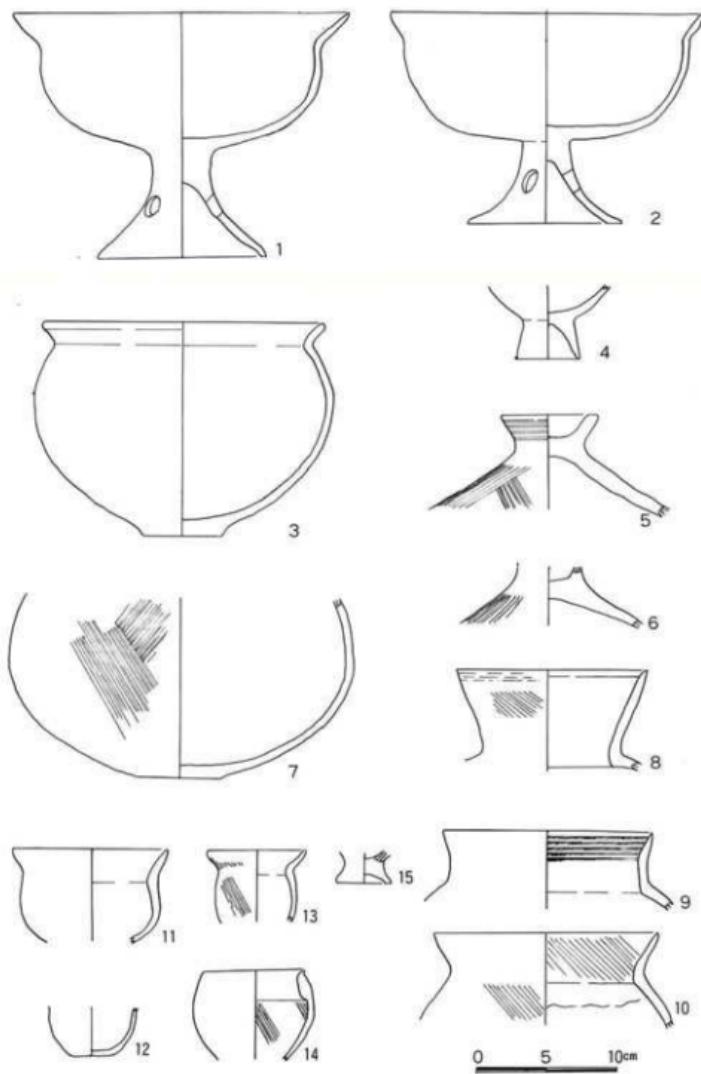
第11図 S区出土の遺物(3)



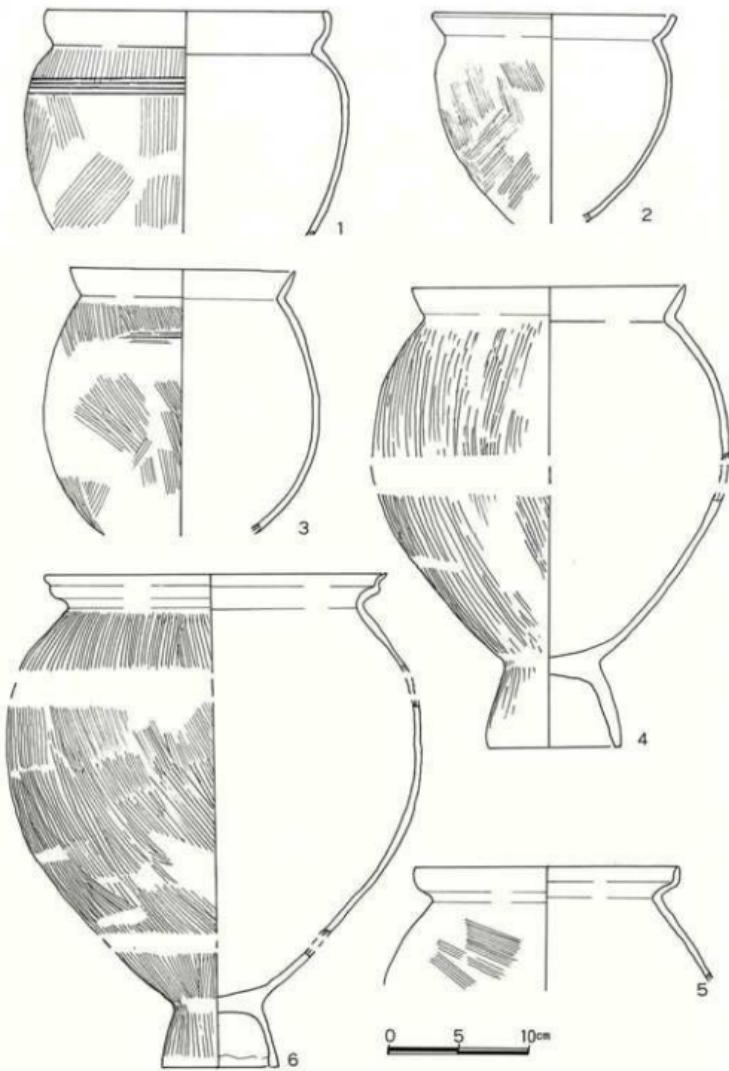
第12図 S区出土の遺物(4)



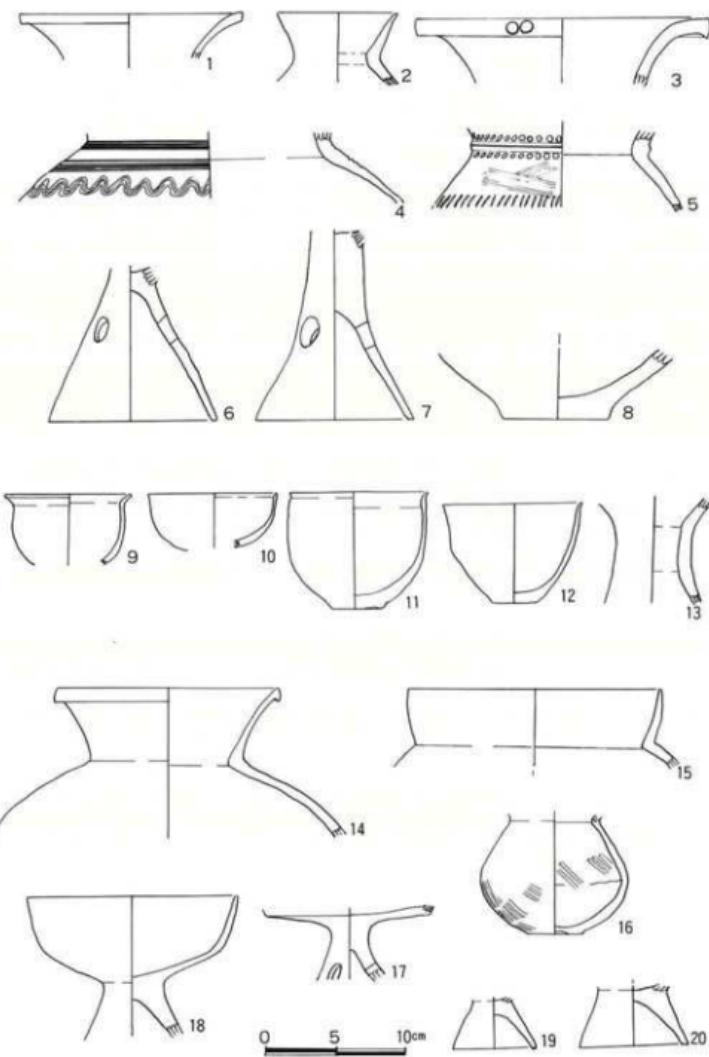
第13図 S区出土の遺物(5)



第14図 S区出土の遺物(6)



第15図 S区出土の遺物(7)



第16図 B区(1・2)・D区(3~13)・G区(14~18)・I区(19~20)出土の遺物



(1) 子安神社遺跡の遠望



(2) 子安神社遺跡の調査状況



(1) S区の溝状遺構



(2) B区の遺構



(1) 高環形土器



(2) 高環形土器



(3) 高環形土器

図版 4



(1) 高環形土器



(2) 高環形土器



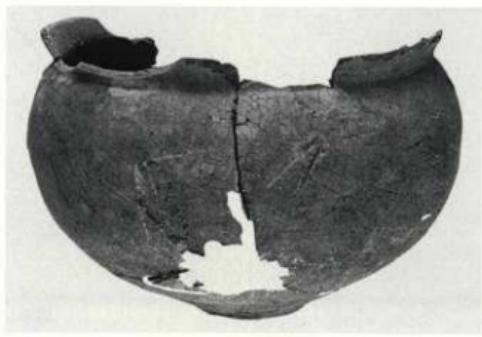
(3) 高環形土器



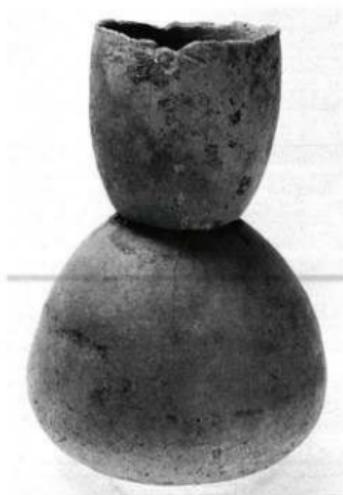
(1) 鉢形土器



(2) 鉢形土器



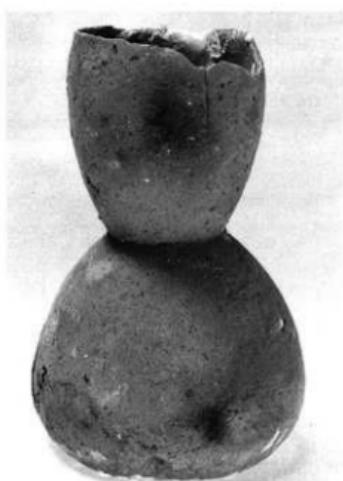
(3) 鉢形土器



(1) 壺形土器



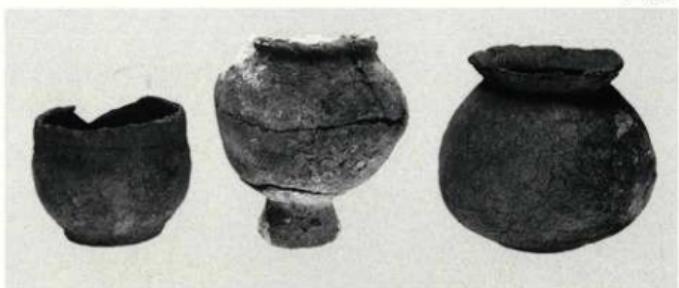
(2) 壺形土器



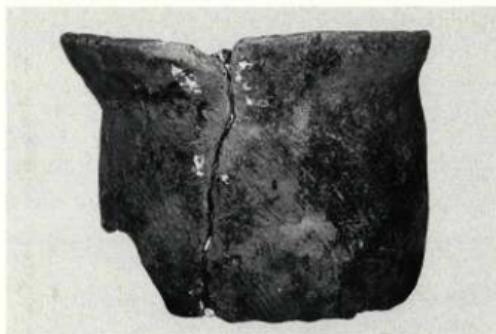
(3) 壺形土器



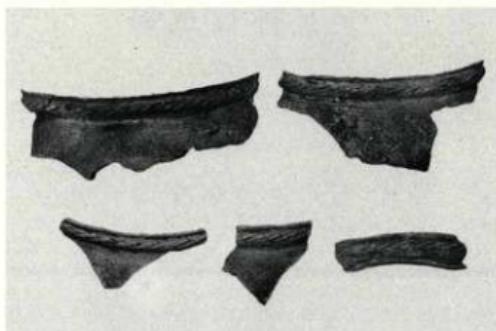
(4) 壺形土器



(1) 小形土器類



(2) 壺形土器片



(3) S字口縁台付壺の口縁部

昭和59年3月20日印刷
昭和59年3月25日発行

子安神社遺跡

編集 大府市教育委員会
発行 大府市中央町五丁目70

印刷 大日本印刷株式会社